

〔二九七三年二月二十二日〕

## 第一回

一九一六年頃まで——生家のこと、幼少時、ギムナジウム、オデッサの大学時代

——家は？ どういう家のご出身なのです？

バフチン 貴族ですよ、たいそう古い家柄の<sup>②</sup>。わが家は、まあその、記録によれば十四世紀からの……。でも肝心なのは、わが家は当時すでに没落していたことです。もうほとんどすべてをなくしていた。

——かくてわれらが猛き一族は衰えたり」というわけですね？

バフチン あはっ（笑）。こういうわけです、わたしの高祖父はエカテリーナ女帝時代の准将だった……。准将、つまり旅団の將軍で……。それがロシアで最初の陸軍幼年学校の一つを創設するために、自分の農奴三千人を売り払ったのです。この学校は、革命の時までありました。

ドゥヴァーキン ミハイル・ミハイロヴィチ、するとつ

ね？

バフチン 生誕七十五年を祝って、わたしに捧げられた本です<sup>①</sup>。

——ところで、話はすこし変わります……。つまり、あ

なたの正確な誕生日ですが？……

バフチン 正確には……一八九五年の……旧暦で十一月四日、新暦では十七日です<sup>③</sup>。

——で、あなたの出生地は？

バフチン オリヨールです。

——自分の名前がついた？ ちがいますか？

バフチン 自分の名前がついていた。つまり、その……

バフチン記念オリヨール陸軍幼年学校です<sup>③</sup>。一時は、

「軍事中等学校」とも呼ばれていた、やはりバフチン記念の。

で、農奴三千人を売り払ったわけだが、それは、実をいえば、まあ計算上のことです。農奴がいたというのではない。それらの農奴は、おそらく、売られたり、

抵当に入れられたりという具合だった、まあ、御多分にもれずね。これは、農奴に換算しての話です。

——ええ、わかります。つまり、ともかく大変な額だったわけですね。

**バフチン** そう、大変な、膨大な額です。彼が、言わばわれわれの没落のもとになったわけです、わが一族のね。彼は大変な金持ちで、領地をたくさん持っていたが、それでもこれは大変な額で、影響せずにはいかなかった。

——それは曾祖父のことですか？

**バフチン** 高祖父ですよ。そう。で、わたしの祖父が没落の仕上げをしたわけです。でも祖父はまだ領地をいくつか持っていた。オリョール県の二つの領地はほぼそっくり、まだ彼の持ちものだった。いわゆるセフスク郡とトルプチェフスク郡です。

——セフスクにはわたしは特別な関心がありました。なぜならばセフスクでイワン・ゲオルギエヴィチ・ペトロフスキーが生まれていますから。あなたはこの一家をご存知だったではありませんか？

**バフチン** いいえ、知りませんでした。

——たしか彼の父親も貴族で、セフスクにギムナジウム

をつくりました、……革命の少し前です。

**バフチン** ああ、いや、でもそれはもうわれわれが領地を売った後です。

——セフスクは、オリョール県ですか？

**バフチン** オリョール県です。そう、今日でもセフスク……トルプチェフスクは……。やはりオリョール県のドミトロフスク地区に……。ちょうど例のドミートリー・カンテミール、アンチオーフの父親の、その領地があったところです。その領地にたしか、アンチオーフ・カンテミール自身も住んでいた。そしてわが家とは親戚だか姻戚関係だかにあった。要するに、わたしのなりの一人が……

——叔父の叔父たちの。

**バフチン** 叔父の叔父、そうです。彼は母方がカンテミール一族とつながっていた。正確なところは知らないが。……わたしは正直のところ、そういうことには関心がなかったもので……。わたしの兄は自分の家系を調べて、そういうことはみな知っていたが、わたしはよく知らないのです……。そこにはわが家の隣人で、やはり親戚だか姻戚関係だかの……例の……スヴァトポルク・ミルスキー家があった。

——ほう！なるほど、あれは大きな一族でした。

**バフチン** 大きな一族だった、そう……。これもやはり家系をすっかり知っているわけではないのだが。小さい頃に、わたしはそれらの領地に行っていた……。スヴァトボルク＝ミルスキー家の誰なのかは知らないけれども……。

——最後の末裔の一人が……。

**バフチン** イギリスにいた最後の末裔の一人が、そのあとわが国にやって来て、たいそう悲惨な最期を遂げた。

——ええ。でも一時は、その、批評家として第一人者でしたよ。ゴリキキーが彼を庇護していた。

**バフチン** そうそう、そうでした。

——わたしは彼に会ったことがあります。

**バフチン** あなたは彼に会ったのですか？ いや、わたしは会ったことはない。

——わたしはこちらで彼に会いました。とても典型的なインテリでした。

**バフチン** ええ、わかります、典型的なインテリというやつ、純真な。つまり、まったく純真な。

——非常に光栄ある……。

**バフチン** いいですか、そもその話……。わたしの思

うに、おそらく、イギリスのコミュニストというのは貴族の出身なわけで……。実際、イギリスの共産党というのは独特なしろもので、労働者はほとんどおらず、貴族とインテリだけなのです。要するに、他人とは毛色のちがったものであろうとする、等々の。で、貴族からなるそうしたコミュニストに、このスヴァトボルク＝ミルスキーは似ていた。やはり貴族だった。

——ところで……あなたのお父様はすでに仕事に就いておられたのですか？

**バフチン** 父はすでに仕事に就いていた。彼は金融の専門家で、複数の銀行で働いていた。でも領地はすでに持っていなかった。祖母は持っていたし、祖父も持っていた。それも全体として、まあ……相当なものを、おそらくはね。まず第一に、とても大きな家がオリョールに残っていて、そこでわたしは生まれたのです。それは地主屋敷に似た家で、ここでは万事が地主屋敷風だった。

——ほう、それはまた面白い！

**バフチン** そっくり残っているかどうか、知りません。それは木造の家で、ほら、天井が高くて壁際に手すり付きの二階をめぐらした造りのものだった。大きな家

で、三十ばかりも部屋数があり、たしか母屋に両そでの離れその他の建物が付いていた……。この家は今もつとも高級な地区の一つにあった。サドーヴァヤ通りとゲオルギエフスカヤ通りの交わる角にあり、その隣りの街区の、ツルゲーネフスカヤ通りとゲオルギエフスカヤ通りの角には、ツルゲーネフの生まれた場所があつて、まあ、わが家とは目と鼻の先だつた。そこで彼は生まれたのだが、その家はすでに無かつた……。わたくしが生まれた時にはもう無くて、ただ場所だけが残つていた。そこには石造りの、それほど大きくない家が建つていたのです。でもその場所はちやんと知られています……ほかでもない、そこにツルゲーネフの生家があつたということで。領地——わたしの叔父の領地の一つですが、それはスパスコエ・ルトヴィノヴォの隣り、ムツェンスク郡にあつて、ムツェンスクからは十キロほどのところだつた。わたしはそれらの土地にも行つています。わたしが生まれた時には、その領地はまだ叔父のものだつた。チーホン・アフアナシーエヴィチ・バフチンがその人です。

——そうすると、お父様は貴族の出身で、重役だつた。  
バフチン そう、そうなのです、かなりの重役でした。

こういうことです、祖父が銀行を創設した。それはオリョール商業銀行といつて、やはり革命の時まででありましたが、大きな支店まで持つていた……ペトログラードに、ペテルブルクにね。で、まあ、これらの銀行は運がなかつた。祖父は、言うなれば、とても善良な人で、おそろしく人を信じやすかつた……。彼は取締役会の代表だつた、この銀行は彼の資本がベースになつていたので……。でも彼の仲間、取締役会の他のメンバーはいかさま師的な人たちで、それは単にいかさま師だつたのか、それともさつぱり目先が利かなかつたのか——ともかく、結局のところ銀行は破産した。大がかりな事件、裁判になつて、当時は有名だつた。というのも、大勢の者が被告席につくことになつたからで、祖父もその一人だつた。たしかに、祖父は逮捕されなかつた、もちろん……なぜなら刑事上の罪にふれることを祖父は何もしていなかつたからです。でもとにかく裁判にはなつた。裁判で、祖父を弁護しにやつて来たのは、有名なプレヴァコだつた。彼がこの事件の弁護をかつて出た。で、全体として、祖父はいかなる刑事上の責任もそっくり免れることになつた。なぜなら、このばあいに誰が、まあその、ペテン師であ

り、誰があまりにも信じやすい人で、提示された取引の内実を全体としてよく理解できぬままサインしただけなのかは、最初から明らかだったから。さてそこで、裁判は次に結審した、これこれの者は投獄、とでも民法上の責任はかなりのものだったので、先に述べた領地はすべて……莫大なものを譲渡しなければならなくなった。しかも、その上に！ 実をいえば、祖父にはそっくり全部を譲渡する義務など、もちろん無かったのです。いいですか、こうしたばあいの常として、なにがしかの委託料……それもいくらかを、例えば一ルーブルにつき二〇コペイカを出す。そんなものです。祖父はそうすることをまったく拒否して、まるまる一ルーブル出していた。そのために、膨大な額を支払うことになったのです。

だが、それにもかかわらず、そのあとでも家は残っていたし、さらに小さな領地さえも、それから一〇万（ルーブル）ばかりのお金も残っていた。そうです。で、そのあとそれがだんだん少なくなっていくた。でも！ 祖母は……。祖父はその前に亡くなっていたが、祖母は十月革命まで生きていて、しかも亡くなったのは——たしかあれは一七年末か一八年の初めだった

——たいそうな高齢で、発疹チフスの後にだった。

——自分の家で？

——バフチン 自分の家で。

——彼女は追い出されず、家も焼けなかったのですか？

バフチン いやいや、家は焼けなかったし、彼女は追

出されなかった。ただ、押しやられましたかね。彼女は、たぶん、住んでいた……わたしは〔この時期のこ

とは〕もう知らないのだが……。わたしの母がそこに

いた……祖母がチフスになって死につつあった時にね

でも、わたしはもうそこには居なかった。彼女はまだ

……資産を持っていた、資産が残っていた……。

わたしの祖父は、金融と商業の仕事をしようと思っただにもかかわらず、あまりにも他人を信じやすい人だった、善良な。わたしが覚えているのは、祖母の物置に、手形のいっぱい詰まった大きな箱があったことです。その手形は、まあ、金を借りた者が返さなかった分なのです。見境なく融通していた。見境なく祖父は金を融通していた。そして最後まで、革命の時まで、我が家には常勤の弁護士がいた。それらの貸金をとり立てる役目の。まあ、ある程度の額はとり立てましたが、全体としては何の意味ももたなかった。でも最後の日

まで、だから、とり立てはおこなわれていましたよ。

両親も、われわれ子供たちも、もうオリヨールには住んでいなかった。だいぶ前からです。でも、毎年夏になるとそこに行っていた——子供たちが行っていた、わたしと、兄と、妹と。

——あなたには、妹さんもいらしたのですか？

バフチン まあ、わたしには妹が三人いた。厳密には、四人ですが。というのも、四人目は養女だったので。<sup>(6)</sup>  
——ということは、六人です。大家族ですね。

バフチン そう、大家族だった。おまけに、その家には親戚が大勢住んでいた。とくに、早くに亡くなった、わたしの祖父の兄弟が。彼は早くに亡くなり、相当な遺産を残した。やはりあれこれの領地で、それらは他でもないドミトロフスク郡にあった。そして彼の子供たち、三人の娘と息子が一人で、やはりわれわれの家に住んでいた。というのも、後見人になっていたのがわたしの祖父で、その後は祖母だったから。

——にぎやかに……。

バフチン まあ、もちろん、自分たちのお金で暮らしていた、というのも……祖父は十分に大きな領地を残してくれたから。おまけに、われわれには親戚がいた

……わが家のほうは没落していたが、親戚はとても裕福で、大金持ちだった。そう。大体においてかれらはかなり傍系ですが、でも十分に近い血筋で、祖母方の親戚だった。とても裕福な人たちでした。言っておきますが、もちろん、誰も残っていない。ただ、わたしのいとこの女性が一人いるだけです。やはりとても裕福な人たちの一人で市長だった人の、娘です。

——オリヨールで？

バフチン オリヨールで、そう。市長だった。そのことが彼を、実際、破滅させたのです。革命前に市長だった。

——そうでしょうかとも。

バフチン そう。で、つまり革命が起こると、彼は善い人だったものだから……たしかに投獄はされたが、でも危害を加えられるようなことはなかった。それどころか、彼しか舵取りのできない仕事があった……それだ。まあ彼は釈放された。彼はそこで必要なことをすべてやった、ええ。すべては何事もなく済むはずだったのに、オリヨールに白軍がやって来た。そしてこんなスローガンが掲げられた、「すべてを革命前の状態に」。すべてを、です！ それでわたしの叔父も再び市長に